

掲載メディア

京都新聞

突然の失語症と向き合う

映画「言葉のきずな」

「失語症」に突然なった人や家族が、演劇を通して障害と向き合う姿を描くドキュメンタリー映画「言葉のきずな」が、21日から東京・渋谷の「アップリンク」で公開される。

脳卒中や事故で脳の言語中枢に損傷を受け、話すことや言葉を理解すること、文字の読み書きが困難になる失語症。映画は2年にわたり、当事者や家族でつくる長野市の劇団「ぐるっと一座」を撮影。田村監督は「もどかしさを抱えながら、自分らしく生きようとする思いを感じてほしい」と話している。

大阪市の「シアターセブン」でも28日から公開。問い合わせは、言葉のきずな上映プロジェクト、電話03（3511）7030。（共同通信）

山陰中央新報

突然の失語症と向き合う 映画「言葉のきずな」

「失語症」に突然なった人や家族が、演劇を通して障害と向き合う姿を描くドキュメンタリー映画「言葉のきずな」が、21日から東京・渋谷の「アップリンク」で公開される。

脳卒中や事故で脳の言語中枢に損傷を受け、話すことや言葉を理解すること、文字の読み書きが困難になる失語症。映画は2年にわたり、当事者や家族でつくる長野市の劇団「ぐるっと一座」を撮影。田村監督は「もどかしさを抱えながら、自分らしく生きようとする思いを感じてほしい」と話している。

大阪市の「シアターセブン」でも28日から公開。問い合わせは、言葉のきずな上映プロジェクト、電話03（3511）7030。

（共同通信社）('13/09/19)

西日本新聞

突然の失語症と向き合う 映画「言葉のきずな」

2013年09月19日(最終更新 2013年09月19日 17時21分)

「失語症」に突然なった人や家族が、演劇を通して障害と向き合う姿を描くドキュメンタリー映画「言葉のきずな」が、21日から東京・渋谷の「アップリンク」で公開される。

脳卒中や事故で脳の言語中枢に損傷を受け、話すことや言葉を理解すること、文字の読み書きが困難になる失語症。映画は2年にわたり、当事者や家族でつくる長野市の劇団「ぐるっと一座」を撮影。田村監督は「もどかしさを抱えながら、自分らしく生きようとする思いを感じてほしい」と話している。

大阪市の「シアターセブン」でも28日から公開。問い合わせは、言葉のきずな上映プロジェクト、電話03(3511)7030。

突然の失語症と向き合う 映画「言葉のきずな」

「失語症」に突然なった人や家族が、演劇を通して障害と向き合う姿を描くドキュメンタリー映画「言葉のきずな」が、21日から東京・渋谷の「アップリンク」で公開される。

脳卒中や事故で脳の言語中枢に損傷を受け、話すことや言葉を理解すること、文字の読み書きが困難になる失語症。映画は2年にわたり、当事者や家族でつくる長野市の劇団「ぐるっと一座」を撮影。田村監督は「もどかしさを抱えながら、自分らしく生きようとする思いを感じてほしい」と話している。

大阪市の「シアターセブン」でも28日から公開。問い合わせは、言葉のきずな上映プロジェクト、電話03（3511）7030。

2013/09/19 17:16 【共同通信】

長崎新聞

突然の失語症と向き合う 映画「言葉のきずな」(09/19 17:16)

「失語症」に突然なった人や家族が、演劇を通して障害と向き合う姿を描くドキュメンタリー映画「言葉のきずな」が、21日から東京・渋谷の「アップリンク」で公開される。

脳卒中や事故で脳の言語中枢に損傷を受け、話すことや言葉を理解すること、文字の読み書きが困難になる失語症。映画は2年にわたり、当事者や家族でつくる長野市の劇団「ぐるっと一座」を撮影。田村監督は「もどかしさを抱えながら、自分らしく生きようとする思いを感じてほしい」と話している。

大阪市の「シアターセブン」でも28日から公開。問い合わせは、言葉のきずな上映プロジェクト、電話03（3511）7030。

朝日新聞

失語症の劇団、2年間の活動記録 東京・渋谷で上映へ



【斎藤智子】脳卒中や事故などの後遺症で言葉を話せなくなった失語症の人たちが、家族と立ち上げた劇団「ぐるっと一座」（長野市）の活動を追ったドキュメンタリー映画「言葉のきずな」が、21日から渋谷区の渋谷アップリンクで上映される。絶望のふちから立ち上がった人たちの「再生」の記録である。

監督・撮影を担ったのは、NHKの番組制作に携わってきた田村周（あまね）さん。ナレーターは俳優の中嶋朋子さんが務める。

田村さんは以前、失語症に関する短い番組の制作にかかわった。「もっとしっかり取り組むテーマ」と感じた田村さんは2年間にわたり、ぐるっと一座の活動に密着した。一座の舞台公演や練習風景、患者と家族の日常の様子を収めた映像250時間を107分にまとめた。

映画「言葉のきずな」のポスター



ぐるっと一座は、長野市の患者と家族でつくる「長野失語症友の会」が2004年、表現の訓練やリハビリを兼ねて立ち上げた劇団だ。一座に感化された長野県上田市や松本市の「友の会」の患者たちも舞台上で自らの思いを表現し始めた。田村さんのカメラは、活動が繋がっていく道筋を丹念に追っていく。

映画では、男性が「ばかやろー」と叫び、うまく話せないもどかしさや悔しさを表す。

夫を支え続けた女性は、いらつく夫から物を投げつけられた経験語る。「一番身近にいる私にしか、あたることができなかつ

たのね。気持ちのキャッチボールがうまくいなくて、ごめんね」

それでも、別の男性が「失語症は不便だが、不幸じゃない」と言うと、患者と家族に共感が広がる。

失語症の患者は全国に約50万人いると言われる。脳卒中や事故などで脳の言語中枢が損傷して起きるとされる。映画には、努力の結果、職場復帰を果たしたり、彫刻の個展を開いたりした人も出てくる。

座長の土屋良秀さん（81）を支えた妻の滯子（みおこ）さん（77）は「どんな人でも、あるがままに自分らしく生きられる社会であってほしいとの思いが、映画にはこめられている」と話す。

上映は10月4日まで。毎日1回、午前10時半から。当日券は一般・学生1300円（平日は学割あり）、小中学生と60歳以上は千円。障害者手帳の持参者とその付き添いは各千円。問い合わせは渋谷アップリンク（03・6825・5503）。自主上映希望者は上映事務局（03・3511・7030）の中橋真紀人さん。

言葉のきずな（シネマトウデ）



チェック：病気や事故で脳の一部が傷つくことにより読み書きや会話が不自由になる失語症の人たちが、言葉だけではなく、表情や手振りで演劇に取り組む姿を追ったドキュメンタリー。長野県で結成された劇団「ぐるっと一座」の活動と、言葉で感情を表現しづらい人たちが言葉の壁を超えてコミュニケーションを交わす様子を通して、失語症や構音障害の実像を映し出す。監督は、テレビ番組のドキュメンタリーを数多く手掛けてきた田村周。言葉を介さずに感情を豊かに表現し、活動的に生きる彼らの姿が胸に響く。

ストーリー：失語症や構音障害の人たちによる劇団「ぐるっと一座」。脚本から役者までメンバーが担当し、病気による苦悩や葛藤、生きる喜びなど、自らの体験を「失語症テーマ劇」として作り上げている。言葉だけではなく表情や身振り手振りをういて表現する彼らの舞台の様子を取材する。

製作年： 2013年

製作国： 日本

日本公開： [2013年9月21日](#)



(C) 2013 言葉のきずな

シネマ・ノハウズ - Films aim to inspire People

更新日：2013/9/19

言葉を越えたコミュニケーションとは？ 『言葉のきずな』が 9/21（土）より渋谷アップリンクでロードショー公開



失語症はある日突然やってくる。意識不明になり気が付くと、言葉が出ない。相手の言葉がよく聞き取れず理解も出来ない。復唱も困難。文字を見ても書いてあることが分らず、読むことも難しい。単語は思い浮かんでも、そのつなげ方がわからない。書くのは論外。周囲のことがだいたい把握できるだけにむしろ焦燥感はつる。1982年、長野で、失語症や発話障害となった障害者・家族・言語聴覚士やボランティアが失語症友の会を作り、活動を始めた。その活動の中から1998年に始まったのが、劇団「ぐるっと一座」。当事者自身が脚本から舞台作り、役者までこなすという「失語症テーマ劇」である。関わった言語障害者、そして家族・言語聴覚士・ボランティアらが、自ら綴る独白・会話・日記などを素材として、発症時の絶望的な気持ち、回復していく喜び、親切に涙を流した日のことを、言葉の壁を乗り越え、ひとつの舞台へと昇華させていく。言葉が交わせなくて、どうコミュニケーションを取るのか、どのように演じるのかという健常者の素朴な疑問に答えるかのように、短いセリフにも苦しみながら、内に秘めた思いを舞台上で表現する団員たち。言葉を自由に操れないからこそ、豊かな感情が溢れ出てくる。内面に秘められた「心の言葉」が聞こえてくる。同座は、2011年から2012年3月にかけて、それまでの取り組みを土台に、長野県各地（松本地区・上田地区・長野地区）に上演を広げた。『言葉のきずな』は、2011年に開催の「テーマ劇・コミュニケーションワークショップ」の制作過程を追い、同時に劇に参加する劇団員の生活や心の内を描くことで、障害者が地域で“人らしく生きる”とはどんなことかを問う。監督は、ビデオアクティビストの田村周。

『言葉のきずな』(2013)

毎日新聞コラム

幸せの学び:<その67> 失語症を知る映画＝城島徹

2013年09月04日

失語症の人も全身で感情を表現する

「俺の言葉、どこへ行ったあ〜」「どうして……、どうしてしゃべれないんだ!」。頭で分かっている、そこまで声に出そうなのに、言葉が

出てこない。悔しくて、身もだえる。長野県内の失語症の人たちや家族で作る劇団「ぐるっと一座」の奮闘を描いたドキュメンタリー映画「言葉のきずな」が今月から東京や大阪をはじめ全国で上演が始まる。病気と向き合い、懸命に自分らしく生きようとする姿を多くの人に見てほしい。

<<私どもは失語症者、家族、言語聴覚士ボランティアの会です。失語症は話すこと、聞いて理解する



こと、書くこと、読んで理解することなどのコミュニケーションの障害です。社会どころか、家庭でさえ孤立しがちな障害です。脳卒中、交通事故などで大脳の言語野が損傷されて、発症します……>>

昨年末、こんな書き出しの手紙を受け取った。差出人は、患者の思いを聞き取りして劇の脚本作りをしてきた土屋滯子さん(77)。約 30 年前の心筋梗塞(こうそく)で失語症の重い障害を負った夫の良秀さん(81)の病室で書かれたものだ。失語症の人みずからが演ずる活動は一昨年春、NHKのEテレで放送され、大きな反響を呼び、その番組制作にかかわったディレクターの田村周さん(45)によって改めて本格的なドキュメンタリー映画が作られる計画が熱っぽくつづられていた。

「感情や人格は変わらないのに意思が伝わらず、人間的にダメな人と見られてしまう。正しく認識してほしい」。98年に「長野県失語症友の会」が母体となって誕生した一座は、闘病の体験や日々の出来事を描こうと、メンバーが役者として舞台上がる。

その演出を手がける旧知のジャーナリスト内山二郎さん(70)から2年前に説明を聞いた時、「これはすごい活動だ」と直感。今春、長野市内で見学した一座の練習に続き、7月末に東京都内で開かれた試写会の関連行事のワークショップを見た。「もっと大きな声で、全身で笑いましょう!」。ファシリテーターを務める内山さんの熱のこもった指導に応え、失語症の人が「ワーハッハッハ」と全身を揺らし、感情を懸命に表現する姿に息をのんだ。

そんな活動に密着して200時間もカメラを回した田村監督や内山さん、土屋さんたちは試写会のあと、ホッとした表情を見せた。挫折や葛藤を乗り越えた感慨を一座のメンバーみんなで共有できたからだろう。現代の医療制度やリハビリは人の内面世界をしっかりと見すえたものだろうか。この映画はまるでそう問いかけるように、人と人のきずなを通した「再生」に光を当てている。上映の輪が大きく広がってほしい。【城島徹】

俳優で外科医の瀬田 直さんのブログです。

このブログの前に、かわさき FM「岡村洋一のシネマストリート」Dr.瀬田コーナーでも「言葉のきずな」について紹介して下さいました。(川崎の地元の FM 放送局ですので、全国ではありません)

[「言葉のきずな」失語症などの言語障害への取り組みを描いたドキュメンタリー](#)

2013-09-22 18:00:52

「言葉のきずな」(2013、日本)

・監督：田村周

脳梗塞などで失語症や構音障害などの言語障害を負った人々とその家族と支援者が集まり、1982年に発足した長野県失語症友の会。彼らは脚本や舞台作り、そして役者もこなす“ぐるっと一座”を立ち上げていた。本作は一座が失語症をテーマとする劇に取り組む姿に密着するドキュメンタリーだ。

脳梗塞を患った著名人には長島茂雄さん、西城秀樹さん、故大島渚監督などがいる。機能回復までの道りは決して平坦ではない。

本作は言語障害に対し粘り強く取り組む草の根の活動にスポットライトを当てた記念碑的作品と言える。財政赤字の今、政府は原発再稼働やリニア新幹線や五輪にお金を浪費せず、本作で取り上げたような国民の健康や福祉に財源を使った方がよっぽどいいと思う。

その他、映画関係の雑誌、医療関係の雑誌、ムービーウォーカー・関西ウォーカー・シネマノハウズ・ピア等のWEB、月刊ナーシング、地域リハビリテーション誌、看護協会協会紙等に掲載されています。